早良組だより

お盆
―合掌の心―

はじめに

私たちの年中行事の一つとして定着しているお盆ですが、「そもそもお盆とはどのようなものか」とお考えになられたことはあるでしょうか。

お盆の起源については諸説ありますが、『盂蘭盆経』というお経の名前を語源としているようです。「盂蘭盆」という言葉は逆さまに吊るすという意味のサンスクリット語「ウラバンナ」を音訳したものです。お盆のことを正式には「盂蘭盆会」といい、略して「お盆」と呼んでいるというのが通説です。その『盂蘭盆経』の中に、次のような話があります。

お釈迦様の弟子の一人、目連尊者は、亡くなった母親が餓鬼道という餓えの世界で苦しんでいることを知りました。何とか助けたいとお釈迦様に相談されたところ、「他の弟子達が集まるときに食事を施してもてなしなさい」と言われました。その通りにすると、母親は餓鬼道を抜け出すことができたという話です。

この話から、一般的なお盆とはご先祖様を追善供養するという考え方に基づいています。ところが浄土真宗では亡くなった方に追善するという概念がないためお盆の意味合いが他の宗派と異なります。浄土真宗の私たちは、どのようにお盆を迎えればよいのでしょうか。

浄土真宗ではお盆という呼び名以外に、亡き方をご縁として阿弥陀様のお慈悲に出遇えたことをよろこばせていただくので「歓喜会」という呼び名もあります。お寺やご家庭のお内仏（お仏壇）、お墓へのお参りを通して、いま生きているこの私のいのちや人生を振り返る時間として過ごすのが、浄土真宗のお盆の迎え方ではないでしょうか。毎年のお盆をお迎えするにあたり、あらためて私たちのお盆の迎え方をご確認いただきたいと思います。

新執行部紹介
新たなメンバーになりました。

上段右から、
副組長　鬼倉 龍英（淨覚寺）
副組長　小林 浩城（西応寺）
下段右から、
副組長　平川 正道（光明寺）
組　長　成澤 隆文（明性寺）
副組長　高田 史敬（栄福寺）

慈光照護のもと早良組門信徒の皆様におかれましてはますますお念仏ご相続のことと拝察いたします。

令和二年度より新執行部が発足いたしましたが、新型コロナウイルス感染症の発生により令和二年度早良組組会も資料による開催を余儀なくされました。しかしながら、各部門の担当法中、門信徒の役員の皆様のご尽力のおかげさまでお念仏のご法灯をお護りいただいておりますことは心より感謝いたしております。

新執行部の発足以降、なかなか皆様にご挨拶も出来ないまま今に至りました。改めて新執行部のご紹介をさせていただきます。

組長 成澤隆文、副組長 小林浩城、髙田史敬、平川正道、鬼倉龍英、のメンバーで早良組の門信徒会活動のお手伝いをさせて頂きます。

本年は無観客ではありますがオリンピックの開催も決定いたしております。無事の成功を願うばかりです。

早良組におきましても感染症対策を十分に講じながら早良組内門信徒活動及び寺院活動の再開を考えております。ぜひ門信徒の皆様方のお力添えいただき共にお念仏相続に励んでまいりたいと思います。

合掌

早良組 組長 成澤隆文

入寺報告 ご挨拶
石川雄大

このたび、2020年（令和2）年2月、真教寺に入寺いたすこととなりました。

2013（平成25）年9月から福岡教区教務所・福岡教堂に配属となり宗務に従事しております。

宗門では来る2023年には「親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要」をお迎えします。

法要がお勤まりになりましたら、早良組の皆さまとご一緒にお参りさせていただきたいと存じます。何分にも浅学非才の身でありますが、早良組の皆さまには、ご指導を賜りますよう衷心よりお願い申しあげ、入寺にあたってのご挨拶とさせていただきます。

合掌

浄土真宗本願寺派 福岡教区 早良組　発行／福岡教区早良組 寺院機能振興・情報啓発部門　事務所／福岡市早良区野芥2-7-8 明性寺内 ☎871-0578　第58号

特集 お盆 ―合掌の心―

お盆の時期

8月のイメージが強いお盆ですが、地域によっては7月にお盆をお迎えするところもあります。

これは巻頭でも紹介した『盂蘭盆経』というお経に「七月十五日」と出てくることに基づいています。明治時代の改暦をうけて、この「七月十五日」を旧暦で行うのか、一ヶ月遅れの新暦で行うのかによって7月のお盆と8月のお盆があるのです。地域によって日程が異なるお盆ですが、一年の中でご先祖や亡き人をご縁にお念仏をする時期と捉えるとよいでしょう

お盆は亡くなった人が帰ってくる？

お盆はどのような日かと聞かれると多くの人が「亡くなった人が帰ってくる日」と答えるでしょう。しかし、お盆のもととなった『盂蘭盆経』を読んでみるとそのような話は出てこないのです。実は「帰ってくる」というのは日本にもともとあった「霊祭り」※などの民族信仰が重なったという説もあります。

阿弥陀如来の本願によってお浄土に生まれ、そのはたらきとして還ってくるのに時間や場所は関係ありません。どのような場所にいても、どのようなときであっても変わらない救いを聞かせていただくのです。

※霊祭り…年二回、帰ってくる先祖の霊を祀る行事

お盆のお飾りについて

お盆のお飾りや風習については様々なものがあります。お盆のお飾りの多くは先ほどの「亡くなった方が帰ってくる」という考えに基づいています。帰ってくるときに迷わないように目印となる提灯を吊したり、野菜などで作った精霊馬を乗り物として準備するのです。

ほかにもほおずきや灯籠流しなど様々なものがあります。仏に成るという事は迷いを離れるということですから、本来の意味でいえばどれも必要ありません。

お飾りについては、各地域の習慣など様々な要因があります。それらを大切にすることがそのままご先祖や仏様を大切にすることにも繋がっていますので、各仏事に合わせて仏様の周りに綺麗にお飾りしていただくことは大変喜ばしい事です。

では私たち浄土真宗ではお盆という行事をどのように捉えるのでしょうか。

お念仏のご縁

本来、浄土真宗にとって特別な日はありません。阿弥陀さまのお救いはどんなときでも変わらないからです。しかし、私たちは日々様々なことがあります。嬉しい事や悲しい事、心持ちは変わります。親しい方のご命日や誕生日、記念日など人それぞれに特別な心持ちになる日があります。そのような日をお念仏のご縁と受け取り、手を合わせお念仏と共に過ごす事が大切です。

亡き方を偲びつつ、そのご遺徳によって仏法に出逢わせていただいたご恩をよろこぶという意味で、浄土真宗ではお盆のことを「歓喜会」とも呼んでいます。

同じ屋根の下で暮らしていても、意外と家族が揃う時間は多くはありません。お盆は多くの学校やお仕事が休みとなり一年の中でも家族が揃いやすい時期でもあります。そうした家族や親族が集まったときにご先祖の方々をご縁として、お念仏申しましょう。

蓮如上人のお手紙

蓮如上人は文明十年の盂蘭盆会に際してお手紙をお書きになりました。そこでは、私たちのいのちは常に風前の灯火のようなものであるから、お盆の時期に限らず、常に仏様を拠り所としてお念仏しましょう、という旨が書かれています。

又いかなる死の縁にかあひなんずらん。今日无爲なればとて、あすもしらざる人間なれば、たゞ水上の泡、風前の燈ににたり。〜中略〜　行住座臥をゑらばず稱名念佛申べきものなり。

（『帖外御文章』百十一通）

〈現代語訳〉「私たちはいつ死ぬかわかりません。水の泡や風前の灯火のように明日も分からない身です。ですから、場所や時を選ばずにいつでもお念仏申すべきなのです。」

亀甲灯籠

巻頭の写真は「亀甲灯籠」という、お盆の期間に京都の本願寺に吊るされるものです。福岡では博多提灯などが有名ですが、もともと霊をお迎えするという意味合いだったものを仏様へのお供えへと転換してお飾りしています。

追善供養

「追善」とは字の如く「善を追加する」ということです。ここで言う「善」は浄土に生まれる力のことですが、それを追加すると言うことは、つまり亡くなった人に善が足りてないという事になります。また同時に私には善を行う力があるという事にもなります。阿弥陀如来は善行も悪行も問題としませんし、善を送るという私の行いも必要としません。そもそも善を行うことも送ることもできない私のところに、何の不足もない「南無阿弥陀仏」が私達に届いているのです。そのことをよろこび、讃嘆させていただくのが私達にとっての仏教行事なのです。